

## C-8 被服作業における疲労の研究(第二報)

中村学園短大 ◎石橋葉子 森田久美子

目的 被服の縫製作業における疲労は昔からさまざまな形容詞で表現されているが、これに関する報告は少なく資料に乏しいと考えられる。私共は被服縫製作業時の生理機能を測定してその変動を検討し、さらに自覚症状も調査したので報告する。

方法 作業時期：1976年6月～7月、被検者：19～20才の健康な女子短大生30名、検査項目：フリッカー値、大脳活動レベルの変化、産業衛生協会の自覚症状調査表による自覚症状、作業内容：縫製、製作方法、材質などは同一とした。作業時間：午前9時開始、午後5時終了、(昼休み1時間)、測定時間：午前と午後の作業前・後で計4回、ただしフリッカー値のみは午前・午後1回ずつふやし計6回とした。

結果 フリッカー値は作業前がもつとも高く、時間の経過とともに低下する。昼休み後や回復するがその後更に低下し、作業終了時には始業前に比べて約10%以上の低下を示した。普通講義の日の約4%と比べるとかなり大きな差が表われた。大脳活動レベルの変化は、作業前値より作業後値の方が低いものが約80%であつた。自覚症状の訴えも多い。